

年の瀬を迎えましたが、今年一年の世相を漢字ひと文字で表す「今年の漢字」が発表され、「戦」が選ばれました。ロシアによるウクライナ侵攻や安倍元首相銃撃事件、そして物価高との戦いなど、多くの人に不安を与えた出来事により選ばれたのだろうと考えます。

私にとって「戦い」で印象に残っているものは何だろうかと振り返ると、一つは「OECD成人力調査」で、もう一つはカタールで開催されたワールドカップです。今日はこの二つについて話をしたいと思います。

まずは、聞きなれない「OECD成人力調査」についてですが、経済のグローバル化や知識基盤社会への移行に伴い、雇用を確保し経済成長を促すため、国民のスキルを高める必要があります。このような中、OECDでは各国の成人のスキルの状況を把握し、政策に資することを目的として、2011年に第1回調査を実施しました。それから約10年を経て、今年第2回調査を行っています。

この調査から得られるデータを他の国と比較したり、第1回の調査結果と比較したりすることで、「成人力」についての現状を把握する資料になり、例えば日本の教育システムでどのような点を改善すべきなのかといった情報を得ることができるわけです。

その調査がどうして「戦い」なのだと疑問に思われるでしょう。実は、その調査対象は住民基本台帳から無作為に選ばれるのですが、なんと私が選ばれたのです。10月に突然、文部科学省から封書が送られ、重要な調査なので協力するようにと記されていました。そして、調査担当者との日程調整を経て、11月末に山形市内の某所にて、調査つまりテストを受験しました。

調査内容は、日常生活の様々な場面で、文章や図などで提供された情報を理解し、課題を解決する力を調べるもので、具体的には「読解力」「数的思考力」「問題解決能力」の3分野についてのテストになります。調査は2種類あり、調査員の質問に口頭で答える「背景調査」の他、「読解力」「数的思考力」「問題解決能力」についてはタブレットに答を入力する方式で行われました。時間にしておおよそ2時間、まさに問題との戦いでした。

全国的にはまだ調査中とのことなので、詳しくお話してできないのですが、1問だけ紹介すると、「積み重ねることのできるコップがあって、3個で13cm、7個で23cmのとき、10個積み重ねたら何センチになるか？」といった問題です。課題解決力を見るものとしては、従業員が突然休まなければならなくなったとき、シフトを作り直す問題とかもありました。薬や食品の成分表の読み取りなど、計算をして求めなければならないものが多く、全体的に難しいと感じました。120分問題と戦いへとへとになったものの、5000円のQUOカードをいただきました。

次は、ワールドカップの「戦い」についてです。

メッシ率いるアルゼンチンがフランスをPK戦の末に破り優勝、残念ながら日本は今回もBEST16の壁を超えることが出来ずに敗退してしまいましたが、どの国の選手も、プレーの後に流れるスローモーションの映像を見ると、フィールドプレーヤーであれば頭のとっぺんから爪先まで、キーパーであれば指一本のところまで手を抜かず、やり抜こうとする・・・一流というのはこういうことを言うのだと、ただただ感心しながら見ていました。

スペイン戦で決勝点をアシストした三笥選手のプレーは「1mmの奇跡」とも呼ばれていますが、それにしてもVARの進歩には目を見張るばかりです。ボールにはチップが内蔵され、観客席の最前列前にはアンテナが張り巡らされ、ボールの位置をコンマ数mm単位で計測できるようです。そして、三笥選手が蹴ったボールは1.88mmラインにかかっていたのだそうです。戦争が科学技術を進歩させるとは聞きますが、スポーツもまた同じ役割を果たす世の中になっていることに驚かされます。

さて、予選リーグの初戦、日本はドイツと戦ったわけですが、その決勝点をたたき出した浅野拓磨選手は三重県立四日市中央工業高校出身です。当時、浅野選手に国語を教えていた知り合いの先生から、浅野選手が3年生の終わりに書いた作文のコピーをいただいたので紹介します。

（全校集会では、浅野選手が書いた作文の一部を紹介したのですが、ホームページに掲載するわけにはいかないので省略します。）

これを送ってくださった先生のメールにはこんなことが書かれていました。

あの決勝ゴール以上に、ゾクっとするようなことを10年前に書いていました。さすがとも思いましたし、浅野らしいとも思いました。彼は3年間、けがを除いて遅刻も欠席もなかったですし、授業中も寝るとかだれるということもなかったです。英語が大の苦手でしたが、海外での活躍を志すためにむしろ苦手に立ち向かうような様子でした。何より体幹が優れているため、背筋は絶えずピンとしていた強い印象が今もあります。彼より足が速い、あるいはサッカーが上手と思われる生徒はほかにもいました。しかし作文に書いたような姿勢を幼い頃から強く思っていたことが、今の活躍に繋がっていると思われます。才能の人というより、あきらかに努力の人と言っていいでしょう。

「努力する人は希望を語り、怠ける人は不満を語る。」とは作家、井上靖さんの言葉です。相当厳しい言葉なわけですが、浅野選手のように自分の好きなことや得意なことのことで希望と努力を語る人間になってほしいものです。それでは、良い年をお迎えください。

（令和4年12月22日 オンライン全校集会）